

# 朝鮮中期初等教育に関する試論的研究 —教材分析を中心に

培材大学校 教授 姜 明淑 著  
獨協大学 教授 川村 肇 訳

## A Preliminary Study on Primary Education in Middle Chosen Dynasty —Focusing on the Teaching Materials

Kang Myung-sook Professor, Pai Chai University  
Translated by KAWAMURA Hajime

姜明淑（カン・ミョンスク 강 명숙）

培材大学校教職部教授。教育学博士。韓国近現代教育史専攻。国家人権委員会で人権教育に関する業務にも従事。主な著書には、『私立学校の起源—一日帝初期の学校設立と地域社会』（2015年、学而時習）、『大学と大学生の時代』（2018年、西海文集）など。資料集として以下の共同編訳を行っている。『教育政策（1）—教育勅語と朝鮮教育令』（2020年、東北亜歴史財団）、『教育政策（2）—一日帝強占期の教育論説』（2020年、同）、『教育政策（3）—一日帝強占期の学校教育』（2023年、同）。

本論文は、教育史学会『教育史学研究』第8輯（1998年）に掲載された。

### I. 序文

朝鮮時代の初学教材についての既存の研究は、小学・大学の段階区分を当然のものとして受け取りつつ、小学段階の教材として開発されたものを収集・整理して、その内容の特徴を分析してきた<sup>1</sup>。また、いつ、どこで、どのような

---

1 金世韓「朝鮮時代初学校教材研究」『漢文学散稿』安東大学校出版部、1991年。  
丁淳睦『朝鮮時代の教育名著巡礼』ベヨン社、1985年。  
朴殷穆他『韓国の教育古典研究』韓国精神文化研究院、1983年。

必要の下に開発され、利用されたのかという歴史・社会的条件については特に関心を持たず、小学教材の内容と価値の普遍性を前提として、主として教材の論理的側面に限定して分析してきた<sup>2</sup>。

本研究は、我が国で今日のように、初・中・高の教育段階区分において、初等段階に該当する教育の形成過程を調べるための基礎作業として始まった。その一環として、伝統的な時代には初等段階に該当する教育、つまり初等教育がどのような姿で、どのような慣行の下で、何を教えて学びながら行われてきたのかを、教材分析を通して明らかにしようとした。

朝鮮時代の初等教育は、家塾、書堂などの教育機関で行われたとされている。実際には書堂を初等教育機関とみるのには無理が多いが、ここでは書堂を初等教育機関とみなし、書堂で使われた教材を分析することとする。これは初等教材の分析結果を、初等教育の普遍化の程度、書堂という機関の拡がりの程度、書堂の初等教育機関としての性格という側面と関連して検討する。このことは一方では、初等教材の変化の過程を通して、初等教育の実情を確認するということであり、他方では教育現実の変化の過程の中で、初等教育についてのアイデアがどのように変わっていったのかを確認するということでもある。本研究は、これを通して、教材の変化および書堂の性格変化と、初等教育についての教育思想の変化が、ともに進行する力動を探ろうとするものである。

まず、書堂の意味を限定する必要がある。この間の諸研究は、大体において書堂が初学者たちを対象に『童蒙先習』、『明心宝鑑』、『通鑑』、『小学』、『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』等の儒学の基本教材や經典を通して、初歩的な水準の經典教育が行われ、加えて初歩的な文芸教育が並行し、このような教育の過程では、暗記中心の教育方法と、それなりに厳格な学齢が適用されたものと記述している<sup>3</sup>。またこのような特徴に立脚して、書堂を伝統社会に存在した初等教育の性格を持った童蒙教育機関と規定している。むしろ19世紀以前の書堂は、中等教育と初等教育を分けないまま、多様な水準の教育を行ってきたとするほうがよからう。そして書堂教育を、官学と書院、師承関係によって行われる講学活動を除外した、全ての私的な形態の教育<sup>4</sup>と見ることもある。し

2 朴蓮鎬「朝鮮中期童蒙教育過程の変化」『教育史学研究』第2・3集、1990年。

金東仁「児童用教材としての『孝経』と『小学』」『教育史学研究』第2・3集、1990年。

3 禹龍濟「朝鮮後期書堂教育の両面性」『教育史学研究』第4集、1992年、80頁。

4 前注に同じ。

かし本論では、形態的な意味の初等教育の伝統的な姿を探るが、ある目的のもとに、書堂教育を初等段階の教育として限定したい。その目的とは、中等教育と未分化な初等段階の教育が、それなりにユニークな段階の教育として分化していく過程が、書堂が初等教育機関としての位置をしめていく過程であり、初等教育が普遍化していく過程であるという仮説を証明することである。

次は用語の問題である。伝統時代の初等教育を小学教育、初学教育、童蒙教育などと様々に呼んでいる。本来の小学は文字の学であり、後に字学および韻学と発展して、大人の学に変わった。今日のような意味の小学は、朱子の『小学』が入ってきた後のことである<sup>5</sup>。それで小学教育というのは、普通は朱子の『小学』に著された教育原理に立脚した教育の意味で、特定した教育内容と原理を想定したものと考えられている。一方本来の小学と、朱子以来の小学が、互いに異なったものではなく、児童教育の二つの側面を明らかにしたものだという李徳懋の、次のような主張もある。

大載記保伝編を調べて見ると、昔は齡八歳から外舎に入り、小芸を学び、小節を履修した。大体小芸というのは六書であり、小節というのは水を撒き、掃いて、応答し、客を接待することを身に付けて敬虔な心構えをする手続きだ。そして一切童学が全て小学なので、六書の小学と朱子の小学を本当に同時に行っても矛盾しない。既に大学の書があり、すなわちまた小学の書もあったはずだが、始皇帝の焚書に巻き込まれ、全て棄てられ、ただ古文籀文若干編が残り、漢書芸文志に初めて小学家を立てた。朱子の博聞にして、どうしてこれを知らなかったのか。ただ焼け残った小学断簡をつないで初本を定め、命名して小学之書としたのだから、まさにその意義あるところが見られる<sup>6</sup>。

また茶山丁若鏞は六書の学である小学の教を当然の前提とした『小学』誦習教育を強調してもいた<sup>7</sup>。事実小学教育という用語は、朱子の『小学』の勉強と『小学』を学ぶ以前の勉強を全て含んで、大学段階の教育を準備する教育と

5 李圭景『五洲衍文長箋散稿』51巻、「小學古今二學辨證說」。

6 李徳懋『雅亭遺稿』5巻、「六書策」。李応百『国語教育史研究』新丘文化社、1975年、23-24頁に再引。

7 丁若鏞著・茶山研究会訳注『訳注牧民心書4』創作と批評社、1984年、45頁。

いう意味で使われている。また童蒙教育は、主にほぼ7歳から15歳の年齢に学ぶ教育<sup>8</sup>という意味で、前近代の児童教育を称する言葉として最も多く使われている。これは教育対象の年齢的心理的特性を考慮した命名だと考えられる。また初等教育という用語は、教育対象の年齢に関係なく、本格的な儒学の勉強をする以前に学文する者という性格を強調した命名のように思われる。ここでは、7歳から12歳の間の年齢を対象に、本格的な学文のための準備教育や、科挙準備と連結した教育ではなく、一つの独自性を持った段階の教育として行われる教育を探るため、今日使われている初等教育という用語を暫定的に使う。

最後に初等教材の範囲の問題である。教材の分類方式を調べて見ると、朴蓮鎬は小学－大学段階論に立脚し、童蒙教育過程が『小学』で完成されると見て、教材を『小学』と小学先修書に分類している<sup>9</sup>。ここで『小学』以外の『千字文』、『類合』、『訓蒙字会』、『童蒙先習』、『擊蒙要訣』のような初等教材は、全て小学先修書に分類される。その一方で渡部学は『千字文』、『類合』、『訓蒙字会』を1次道具学習書とし、『童蒙先習』、『擊蒙要訣』などを、1次内容学習書に分類しており<sup>10</sup>、禹龍済は文字学習書と儒学入門書に分類している<sup>11</sup>。他方、高宗の経筵官を務めた晤堂李象秀は、書堂教育の類型を、音而不積の段階、訓積の段階、科文中心の教育、理学中心の教育に分類しており、丁淳睦はこの類型に従って教材を分類している<sup>12</sup>。この分類に従えば、『千字文』と『童蒙先習』、『兄学編』、『新增類合』などは音而不積段階の教材で、『史略』や『通鑑節要』、『擊蒙要訣』、『兒戲原覽』、『明心宝鑑』などは訓積の段階の教材である。ここでは教材を文字学習書と儒学入門書<sup>13</sup>に分類し、前者には『千字文』、『類合』、『童蒙字会』など、様々な種類の字書を含ませ、儒学入門書には『童蒙先習』、『童蒙須知』、『明心宝鑑』、『啓蒙編』などに『小学』を読む前の儒学入門教材を含むようにする。『小学』を除外する理由は、書院や郷校での読書順序が主に『小学』－『大学』－『論語』－『孟子』－『中庸』－『詩経』－『書経』－『周

8 朴蓮鎬「朝鮮中期童蒙教育過程の変化」『教育史学研究』第2・3集、1990年、49頁。

9 前注に同じ。

10 渡部学著、ソウル大学校教育史学会訳『韓国教育史』以会文化社、1995年、108頁。

11 ソウル大学校教育研究所編『韓国教育史』教育科学社、1997年、158頁。

12 丁淳睦「18世紀書堂研究」韓国精神文化研究院博士学位論文、1985年、136頁。

13 実際初等教材を分類する基準について、再び議論する必要がある。初等教育の性格と教材の特性に照らして、より厳密に分析的に定義される必要がある。個人的な意見としては、むしろ日帝時代の初等教育のように、修身教材と呼ぶのも一つの方法だと思う。

易』-『春秋』の順に、『小学』から始めるところにもあるし、小学先講の原則に見られるように、『小学』は科挙の勉強の始まりと呼ばれていたために除外されていた。問題として残るのは『擊蒙要訣』と『史略』や『通鑑』のような史書などである。『擊蒙要訣』は童蒙教材に分類するが、内容を見ても仁祖7年に全国の郷校で印判され、官学の教育課程運営の指針にもなったという<sup>14</sup>、実際の使い方の面で見ても、初等教材と見るのは難しい。その上問題になるのは史書である。大部分の儒学者たちは、経-史の順序で読書することを主張しており、燕巖の場合『史略』や『通鑑』は童蒙の教育図書に不適切で、読んで はだめだと主張している<sup>15</sup>。しかし李象秀の分類や、燕巖の文章が示しているように、当時実際には『千字文』、続いて『史略』や『通鑑』を読んで、その次に『小学』や四書三経を読んだように思われる<sup>16</sup>。つまり『千字文』に続いて史書を読む、経-史ではなく、史-経の順序に勉強した。勉強する順序についての問題と、なぜ『史略』と『通鑑』のような史書が実際に大切に読まれたのかを検討することは重要な課題であるが、ここでは史書を『童蒙先習』を含む文字学習の後の段階の教材として、今日の立場から見ると、初等教育教材と見るよりは、中等教育教材と見ることができる。

## Ⅱ. 儒学入門書：『童蒙須知』から『童蒙先習』へ

一般的に初等水準の書堂教材として『千字文』と『童蒙先習』、『明心宝鑑』などを挙げ、地域によっては『推句』、『四字小學』、『啓蒙編』、『学語集』なども使うことを指摘する。書堂教育の性格上、地域によって多様な教材が、同じ名前の教材ではあっても、多少は異なる内容に再構成された教材がよく使われ

14 『仁祖実録』7年8月の記事。前掲朴蓮鎬論文、57頁に再引。

15 奎章閣に所蔵されている『談叢外記』に「千文」、「史略不可読説」などが掲載されている。この文章の著者に関して異説があるが、ここでは朴趾源のものとしておく。

16 実際、勉強する順序においては、『千字文』のような文字学習書を勉強し、続いて史書を読んで文理を開いた後に、経書の勉強に進んでいったという記録は数多く見い出せる。例えば、眉巖柳希春は次のように勉強する順序を提案した（『眉巖先生全集』4巻、庭訓、第10文学15面）。

凡兒童、先學字類、次學聯珠詩格、次讀少微通鑑、以發其文理、次讀庭訓內篇、以知先務、次讀詩書大文、以為他日講經之本、次讀小学統蒙求、以興起好學之心、乃其序也。沢堂李植や崑堂李象秀もまた、経-史の順序ではなく、史-経の順序で勉強することを明らかにしている。これは経-史の順序で勉強せねばならないという多数の儒学者の主張とは異なっている。

ていたことが考えられる。また、よく見過ごされがちではあるが、書堂でいつも上記の教材が使われていたのではない。時代によって、特定の教材が広く使われ、他の教材に代置された可能性も考えられるし、同じ教材ではあっても、特定の編纂方式の教材が特定の時期に好まれたこともある。本論では、様々な点で地域的な特性と時代別の特徴を全て調べていくことは困難であり、先行研究で明らかになった点を土台にして、時代別の特徴だけを概略的に調べてみようと思う。特に時期別の初等教材に、どのような変化が現れたのかを中心に探ることとする。

まず朝鮮前期にはどのような教材が初等教育用に使われたのだろうか。江湖金叔滋（1389－1456）は、授書次第で弟子たちを教える時、勉強する順序を無視するのはだめだと指摘し、『千字文』、『類合』を教えた後、『童蒙須知』、『幼学子説』、『正俗編』を教え、全て背誦できるようになった後、『小学』に移り、事親、敬長、隆師、親友の道理に従ってその本源を涵養するようにした。次に『孝経』－『大学』－『論語』－『孟子』－『中庸』－『書経』－『春秋』－『易経』の順に教え、その次に『通鑑』と諸子百家を読むようにした<sup>17</sup>。

この文章を通して見ると、金叔滋の主張と当時の教育現実の間には、ある程度の乖離があったとしても、15世紀初めには『千字文』、『小学』、『孝経』といった順序で勉強したことが分かる。『童蒙須知』は朱子の作と推定される教材として、中宗12年に慕齋金安国（1478－1543）が慶尚道山陰県で刊行したことがあり、蘇齋盧守愼（1515－1590）が簡単な注解を付けて使うなど、朝鮮前期に広く読まれたが、壬辰倭乱以後にやや沈滞したと言われている<sup>18</sup>。ここから朝鮮前期には『千字文』－『童蒙須知』が初等教育段階の重要な教材だったと推定することができる。そうしてみると『童蒙須知』はどのような性格の教材として、どのように使われ、当時どれほど普及していたのだろうか。次の資料を見てみよう。

李若氷が申し上げるに……「聞くと、元子は今やっ和三歳なのに、書を読むといえますから、やはり臣民の福です。慶尚道觀察使の金安国が『童蒙須知』を山陰県で刊行しましたが、この本は子どもがすべきことを抜粋したもので、食べ物、衣服など日用のことがすべて記録されているので、この本を

17 『江湖先生実録』、行状。

18 前掲朴蓮鎬論文、48頁。



使って元子を教えるようお願いします」というと、上曰く「『小学』を知らない人たちは子どもが学ぶものだと軽率に考え、またそれを学ぶ人をあざけるのは実になげかわしい。これは一生を通して学び行うものであり、これ以上良いものはない。『童蒙須知』は子どもが学ぶべきものだ」<sup>19</sup>。

『童蒙須知』は児童がしなくてはならないことを書きおいたもので、『小学』が児童だけではなく、一生学び一生行わねばならない教材で、『童蒙須知』は児童が学ばなくてはならない児童用の教材としての性格を持つように刊行された教材として使われていたことを示している。

しかし『童蒙須知』がこの当時、どれほど広く使われていたのか、どんな教育機関で使われていたのかについては分かっていない。『童蒙須知』の使用頻度については、次の資料を見ると判明する。

趙憲が辞職しながら啓を陳述した。時間がある印匠たちに、真西山の『政経』と『止止堂稿』を印刻させ、また『童蒙須知』を印刷させてください。……また臣が『童蒙須知』を見てみると、子弟たちをあらかじめ教えて正しく育てるには、この本より適切なものではありません。しかし世間の父兄たちは、この本でまず子弟を教える術を知らないため、その子弟が大きくなった後には、父兄の命に反して『小学』、『大学』に進もうとしません。晦庵朱子が緊切に後世を啓導なさった意図が廃れてしまうかと心配です。それゆえ臣は提調柳希春に口訣を尋ね、金玄成に本を借りて写し、現在板刻が終わってまもなく印刷しようとしています。印刷が終わり次第、15帙をそれぞれまとめて八道の監司に送り、各邑から来る吏民たちに、それぞれ1部ずつ書き写させて子どもたちを教えるようにしてください<sup>20</sup>。

このように『童蒙須知』が児童用教材として『小学』の前段階の教材という性格を明らかに示している。また『千字文』のような文字学習書の勉強を終えて、すぐ『小学』に続いて来る教育の非効率性を指摘しつつ、『童蒙須知』が『千字文』と『小学』の勉強の間の期間に読まねばならない教材にもかかわらず、当時の父兄たちはこのような順序をきちんと踏まないで、『童蒙須知』が

19 『中宗実録』31巻、12年12月乙酉朝。

20 『宣祖実録』9巻、8年3月乙卯朝。

あまり広く用いられなかったことを間接的に明らかにしている。それで『童蒙須知』を印刻し、列邑の吏民子弟に教えることを勧める。この文章は『童蒙須知』の使用頻度と利用方法に関する示唆を与える。しかしまた他方では、『千字文』と『小学』の間に別の課程がなくてはならないということと、この課程を教える教育機関の必要性をも明らかにしている。これは以後の『童蒙先習』出現と、それを教える機関（人）の設立を主張する根拠になる。このように限定された範囲でも『童蒙須知』が教えられていたことを見ると、『千字文』－『童蒙須知』－『小学』の勉強の過程が朝鮮前期の実状を部分的にも示しているものだと見ることができる。

それでは次に、『童蒙須知』がどのような本であるか、より詳しく見てみよう。『童蒙須知』が朱子の著作であれば、この本は朱子の小学教育論がよく反映している教材だとすることができる。この点を念頭に置いて、朱子の序文の内容を見ると、次のようになっている。

大抵童蒙の学は衣服、冠や靴から始まり、次に言い方、歩き方に及び、その次に水を撒き、掃いて綺麗にするに及び、その次に文を読み文を書くに及び、雑多な細い問題に至るまで、全て気をつけねばなりません。今、項目に従って配列し、その名前を童蒙須知と呼びます<sup>21</sup>。

序文でも明らかなように、『童蒙須知』の内容を身なり、歩き方、清掃などについての細かい行為指針、つまり童蒙を直接連れて行き来しながら、そのままお手本を見せてもいいほどの詳しい行為指針満載である。例えば、「他人の本を借りた時は全て置簿し、主人の名前を記録しておき、時が来れば返せ。窓にも壁にも机や本の中にも、字を書いてはいけない」<sup>22</sup>としており、児童には日常生活の礼節を身に付けることが重要だという教育論がそのまま入っているということができる。しかし儒教的な人倫についての言及はほとんど見当たらず

21 夫童蒙之學、始於衣服冠履、次及語步趨、次及灑掃涓潔、次及讀書寫文字、及有雜細事宜、皆所當知、今逐目條列、名曰童蒙須知。この文章は金満壽（1823－1904）の景山先生文集に掲載されているもので、乙酉文庫版『童蒙先習』に再録されている。李応百によれば、ソウル大学校図書館に所蔵されている『蒙養編』に「盧守慎疏義朱先生童蒙須知」が収録されているという。乙酉文庫版の訳者と李応百は引用したこの部分について異なった解釈をしており、ここでは李応百の解釈にならった。

22 凡借人文字、皆置簿、抄録主名、及時取還、窓壁几案文字間、不可画字。



ない。このような内容のため、加地伸行は『童蒙須知』が本格的な礼教教育が始まる前の10世以前の時期に使う教材<sup>23</sup>だと評価している。

一方、1541年に朴世茂によって『童蒙先習』が出る<sup>24</sup>。著者の序文や跋文がなく、編纂の動機や過程は詳しくは分からないが、朴世茂の5代子孫の朴聖輅が「この本はあくまでも家門の子弟たちに家塾で学ばせる内容にしようとしたのだ」<sup>25</sup>と言っているように、児童教育用に編纂したものと思われる。この本は盧守愼が宣祖初期に、王世子（皇太子）の書筵の教材として使うことを建議して認可を受けた後、16世紀末に全国的に流布し<sup>26</sup>、広範囲にわたって読まれたものと考えられる。この点は趙克善（1595～1658）が「世間では、この本は児童の学習に便利だと考え、多く刊行されており、今日児童たちがこの本を読んで誦みじるのをよく見かける」<sup>27</sup>と言及して、1682年に『童蒙先習』の跋文を書いてその内容を紹介し、奨励した宋時烈（1607～1689）も「私が幼い頃の記憶では、他の家の子弟の中で初学者でありながらこの本をまず勉強しなかった人はなかった」<sup>28</sup>と言っていることから確認することができる。

つまり16世紀末から、遅くとも17世紀からは『千字文』－『童蒙須知』ではなく、『千字文』－『童蒙先習』の勉強の順序が定着したと考えられる。しかしここで注目して欲しいのは、どのようにして性理学の主唱者とされている朱子の手になる『童蒙須知』を『童蒙先習』が取って代わることができたのか、ということである。

まず『童蒙先習』の勉強を勧める沈守慶（1516－1599）が「この本はまず五

23 加地伸行「儒教における子ども観」『子どもの発達と教育2』岩波書店、1979年、207頁。この論文で加地は、10歳を超えて学校で教育を受ける時は『童蒙須知』のような細々としたことを言わず、言語必謹、容貌必莊、衣冠必整のような大まかなモットーを羅列して置き、朱熹が論定し、程端蒙・董銖が編纂した『朱子論定 程董學則』を勉強し、次に「礼記」の曲礼編や内則編などに進んでいる親に対して敬い献身する礼教上の教えが入っている『小学』を学ぶという。『童蒙須知』は礼教とあまり直接的に結びつかず、礼教の教育以前の実践的なマナーを教えている教材だと見ている。

24 著者と発行年代については諸説あるが、本論ではその点別段の考証をせず、朴世茂が1541年に制作したものと考えておく。

25 此冊只欲令一家子弟、課学於家塾矣（『英祖実録』54巻、17年7月丙子朝）。

26 前掲朴蓮鎬論文、54頁。

27 世爲其便於童蒙、世方刊行矣。今日偶偶看童蒙輩誦讀。『冶谷先生集』10巻「三官記 目官」、渡部学『近世朝鮮教育史研究』雄山閣、1969年、252頁から再引。

28 余幼時、見人家子弟初學者、無不以是善爲先（『童蒙先習』、跋）。

倫を叙述し、次には中国歴代の事実を叙述し、その次には我が国のことを叙述して、実に経と史の大略を兼ねていて、童蒙のまさに身に付けるべきことであり、童蒙を教えるのにこの本を先にしてはどうだろう」<sup>29</sup>と指摘しているように、児童用教材として様々な長所を持っている。『童蒙先習』は経と史の大略、例えば渡部学の表現を借りれば、経史にわたる全学問の最少必須を抽出した面で教材として注目する価値がある<sup>30</sup>。この点は宋時烈によっても認められている。宋時烈は『童蒙先習』の跋文で次のように述べている。

その該博でありながらも簡略な説明は、学問の中で体認した一大公案と言わざるを得ず、順次記録した歴代は、また歴史家の総目だ。あるいはこの本の中で理気や性命などの説を編集したことを疑い、児童がわかることではないというが、これは作者の本意の所在を知らないのだ。朱子がかつて仁について説明するというには、これらの名称は古人の教えて、小学の時からすでに白直分明な訓説であり、このような道理を知り得れば、着実に移さざるを得ず、その地位を築いていく所以である。もし茫然として分からないのであれば、彼らが求めるものは必ずや一生分からないことになるから、再びどうやって希望し、思慕し、その力を使う術を知りえるだろうか、と。今勉強している児童たちは、諸般の名称や境界を大体知っているが、ついに帰結するところがあるのは、必ずこの本から得るのだから、その功労がどうして大きくないわけがなかろうか<sup>31</sup>。

宋時烈が見るに『童蒙先習』の最も大きな貢献は、この本が初等段階の教材であるにもかかわらず、学問の核心概念を提示しているということである。理気問題に関する当時の議論に従い、趙克善が『童蒙先習』に表現された「蓋自

29 其書先敘五倫次敘歴代、次敘東國之事、實兼經史之略、童蒙之所宜先習也。教童蒙蓋以爲先乎。『古鮮冊譜』第三冊。前掲渡部学『近世朝鮮教育史研究』、255頁から再引。

30 前掲渡部学『韓国教育史』、110頁。

31 其該括約説、無非學問中體認、一大公案、而所序歴代、又史家之總目也。或疑編內所輯理氣性命等説、非學童所能知、此則不知作者本意所在也。朱子嘗論仁説曰、此等名義、古人之教、自小學之時、已有白直分明訓説、得知此道理、不可不着實踐履、所以實造其地位也。若茫然理會不得、則其所以求之者、乃其平生所不識之物、復何所向望慕愛而知所以用其力耶。今之童学、略識諸般名義界限、終有所歸宿者、必於此書而得之、其功豈不大哉（『童蒙先習』跋）。

太極肇判、陰陽始分、五行相生、先有理氣」という区節を問題にし、理気問題を扱うのは不適切だ<sup>32</sup>と批判すると、宋時烈は児童たちが理解するのに困難で、多少難しいかもしれないが、学問の第一歩から学問の核心概念を提示してくれており、これが後で学問を磨くときに一定の方向性を持つようにしてくれるだろうという著者の配慮に気付いていないのだと逆批判しながらも、『童蒙先習』の教材としての価値を擁護する。

『童蒙先習』は経史の大略、つまり学問の要諦をよく提示してくれているという点が最も重要な特徴である。しかも『童蒙先習』は以前の教材とは違い、我が国の人によって作られた、我が国の歴史について叙述しているという点でも注目された。英祖が御製序文で「文章はたとえ簡略でも、記録は広く、本はたとえ小さくとも、含むところは大きい。……私はまたこの本の末で我が国が初めて開国し、朝鮮という国号を持つようになるに至ったことを喜んで追慕し、再三感激した。……朝鮮に入ってからようやく礼楽がすべて起こり、文物がすべて揃っているが、惜しいことに記述する者がむしろこれを記述していないのだ」<sup>33</sup>と書いているように、英祖は『童蒙先習』で朝鮮の開国と王朝の繁栄を記述したものとして、朝鮮王朝の伝統性を明らかにしたことを高く評価していた。この点もまた王が直接御製を書いて『童蒙先習』の刊行と配布を勧めるようにした要因になった。このような諸点が恐らく『童蒙先習』が『童蒙須知』を代替し、広く使われる契機になったものと推定することができる。

しかしここで注目せねばならない『童蒙先習』の他の特徴がある。このことによって、16世紀末以後の朝鮮社会の特殊性と噛み合い、当時『童蒙須知』のような別の教材が刊行されていた<sup>34</sup>にもかかわらず、『童蒙先習』が『童蒙須知』に代わり、教材として広く使われるようになったと見ることができる。その特徴とはすなわち『童蒙先習』が細い行為指針を扱っていないということである。再言すれば、我が国の歴史を扱っている経と史を結合した性理学的歴史叙述をして、経と史の大略をともに学ぶことができる内容構成上の特徴ではなく、日常の細い行為指針を扱っていないという児童教育論上の独特な観点である。

32 前掲渡部学『近世朝鮮教育史研究』、260－261頁。

33 文雖約而錄則博、卷雖小而包則大…余又於卷下、國初開創、受號朝鮮之文、慨然追慕、三復興感也…入于我朝、礼樂畢舉、文物咸備、惜乎、述者之猶遺乎此哉（『童蒙先習』、御製序）。

34 柳富鉉「童蒙先習の書誌的研究」『書誌学研究』第5・6集、1990年、489頁。

『童蒙先習』は『小学』につながる教材であるにもかかわらず、小学－大学の儒教教育論で小学段階の教育に強調する日常生活の行為指針を暗誦しつつ、道徳の原理を内面化するようにする面が欠如している。つまり、朱子式の伝統的小学教育論に立脚した教材だと見るのは難しい点がある<sup>35</sup>。以後、我が国儒学者による『小学』の体制に準拠して、子どもたちの日常生活についての模範的な型を提示する児童用教材が『養正編』を始めとして様々に出現し、『童蒙先習』だけが広く使われたのではなかった。『童蒙先習』が教材として作られ、広く使われるようになった下地には、朝鮮性理学のような道学的学問が発達しつつ、児童たちに適合すると考えられる教育内容と教育方法についての考え、つまり初等教育の性格についてはっきり認識し始めたからだと見ることができる。道徳の原理について理解が可能な時期が例えば成童以後の時期である15歳以後からだという慣例的思考とは異なり、幼い頃から学び始めた時からすぐに核心概念を示してやらねばならないということに、初等教育についてのアイディアが変化して行ったということである。日常生活の些細な行為指針をこめている『童蒙須知』より、性理学の大綱を要約して学問の核心概念を先に提供してくれる『童蒙先習』が、道学一辺倒の当時の学問風土に、より親和力をもっていたことだろう。

『千字文』・『童蒙先習』は、18世紀以後、多種の初等教材が編修されても、依然として主動的な地位をしめていたが<sup>36</sup>、19世紀末、20世紀初頭の書堂教育が漸次初等教育として普遍化していくのとは異なり、その地位は徐々に弱体化し、『千字文』－『童蒙先習』の順序がくずれ、『朱子小学』や『推究』、『明心宝鑑』などの教材が『千字文』の次に読まれ始める。また『千字文』－『童蒙先習』が読まれても、そのことの学習の意味は薄れ、教育を受けるものとしての素養

35 既存の『童蒙先習』についての研究は『童蒙先習』または『小学』を典型とする教材だと評価している。しかし『小学』が原理（経）と細い生活指針（事）という構造をとっている一方、『童蒙先習』は原理（経）と歴史（史）という構造をとっていることを、より注目すべきだと考える。崔鳳永（「童蒙先習研究」『韓国航空大学論文集』第22集、1984年、173頁）は、『童蒙先習』の原理と歴史の構造を体用構造と解釈しつつ、『小学』の構造とさほど変わらないという考えを間接的に表明している。しかしながら、児童に日常生活の細い行動指針を教えることと、歴史の中の人間の行為（史）を教えるということは、その意味が違ふと見なくてはならない。

36 19世紀末、崑堂李象秀が「郷塾通行之法、幼子始受周興嗣千字文、朴世茂童蒙先習、此時音而不釈」（李象秀『崑堂集』17巻「発蒙正軌」）とするのを見れば、この時期にも『童蒙先習』の勉強の順序は変わっていなかったようだ。

を整えるのに必要な内容として扱われるのみである。

17世紀以後、19世紀初頭まで、『千字文』-『童蒙先習』の順序で同じ教育内容の初等教育が行われていたとはいえ、このとき使われた『千字文』と『童蒙先習』の版本と編集方式は、非常に多様であった。『千字文』の場合、様々な方式の版本が20世紀初頭まで70種余りがこぞって刊行され、また内容自体が全く違った『千字文』も20種余りを超えている<sup>37</sup>。『童蒙先習』の場合、漢文に吏読として「懸吐」を付けたもの、漢文に吏読の略体として「吐」を付けたもの、漢字ごとにその下にハングルでその音を表した「吐」を付けたもの、「吐」を付けた大文の意味を漢字で交えながらハングルに書き写したものの、諺解したものに絵を一緒にはめたものなど、様々な方式で教材が編纂されていた<sup>38</sup>。このような編纂方式の変化を通して、間接的にはあるが、初等教育がかなり普遍化していくことを推し量ることができる。

### Ⅲ. 文字学習書：『千字文』と『類合』、『訓蒙字会』、『新增類合』の登場

『千字文』は朝鮮社会で文字学習書として不変の地位を占めてきたが、16世紀に『類合』と『訓蒙字会』と『新增類合』などの文字学習書が相次いで編纂され、絶えず批判されてきた。18世紀になり、朴趾源は本格的に『千字文』学習の不適合性を指摘している。この批判を通して、当時の実状と文字学習の問題点、文字学習についての考えが何だったのかを調べてみる。文字教育についての考えの変化は、初等教育の内容と制度において、当時の初等教育にどのようなやり方であれ、影響を与えただろう。

『千字文』は一つの文字も重なることなく基礎漢字をほとんど収録しているという点、暗誦と文字学習に有利で便利な四字成句の形態をとっている配列の面などから、その教育的価値を認められてきた。しかし『類合』が文字を類別に分類し、整理する方法を選択したことで、『千字文』を間接的に批判し、『訓蒙字会』は実字中心の教材編集をして、『千字文』と『類合』の勉強の難点である「字与物二」現象を直接的に批判している。

まず『類合』の批判を検討してみよう。『類合』は徐居正の著作物として知られているが、現在残っている版本がなく、その実態をつかむことはできない。しかし柳希春が当時流行していた『類合』を新增し、1574年『新增類合』を刊

37 権五石「書堂教材に関する書誌的研究」『書誌学研究』第10集、1994年、953-956頁。

38 前注、956頁。



行したが、この『新增類合』で従来の『類合』の性格を推測する他はない。柳希春が『新增類合』を編纂するようになった動機は、彼の序文と跋文に見ることができる。序文では「『類合』は文字の選択が細かく、適切で、多くの人々がそれを好んでいます。けれども規模が大きくはなく、緊要な文字の見落としが多く、大した見聞がないにもかかわらず、つぎ足すことで何とか完全なものにしました」<sup>39</sup>としており、跋文では「東宮に進講する『類合』の内容に、僧侶を尊び、儒教の聖人を貶めるのを見て、修正する意図を持ったのですが……単に童蒙を教えるための資料にしようと思いました」<sup>40</sup>と書いている。『類合』の原本が残っておらず、断言することは難しいが、『類合』は収録している文字数が少ないけれども、詳しく簡便で、人々に愛用されていたが、文字学習に緊要な文字を多く見落としていたらしい。これに従えば、『新增類合』を編集するに当たって、文字数を3000字余り大幅に増やし、内容上は、仏教の影響を受けた部分は削除し、儒教的内容を強化したものと見られる。

しかし『類合』は「訓蒙字会引」から厳しい批判を受けることになる。批判の内容は「『類合』がたとえ様々な文字を扱ってはいても、虚字が多く、実字が少ないので、学び終わっても事物の形態や名前の実情を身に付けることができない」<sup>41</sup>ということだ。こうしてみると、『類合』は虚字が多いという文字学習上の重大な欠点を持っていたことが分かる。しかしながら一方では、『類合』はそれなりの長所を持っていて、この点は『類合』以後に現れた文字学習書編纂の基本方針になっていき、朴趾源も彼の文章で、この点を肯定的に評価している<sup>42</sup>。『類合』の長所というのは他でもなく、同じ類に属している種を順次続けて目を通していく方式で文字が配列されており、学童の心理と思考によりよく符合しているというところである<sup>43</sup>。つまり類別の分類体制に立脚して文字を掲載している。すなわちこの点が『千字文』の問題点でもある。18世紀に至り、『千字文』が児童用教材として不適切だと直接的で辛辣な批判を展開した朴趾源の論旨も、まさしくこの問題である。

39 「然選字精切、人多愛之、第規模不廣、至大至緊之字、遺漏尚多、臣不揆諛聞、修補增益、略成完書」。

40 「竊觀東宮進講類合、其中尊僧尼、而黜儒聖、則有修正之志……只欲備童蒙之誨誨」。

41 「類合諸字而虚多実小無從通韻事物形名之実矣」。

42 後に見るが、朴趾源は彼の「千文」で『千字文』の弊害を指摘した後、対案として『類合』を提示している。

43 前掲渡部学著、ソウル大学校教育史学会訳『韓国教育史』、109頁。



わが国の人々は、いわゆる周興嗣が編纂した『千字文』を得て、それがまるで天の国の玉皇上帝のところから離れて、人間の世を巧妙に説明していたかのように思うのは、何と幸せなことだろう。天を天の字、地を地の字だと学ぶとき、それは日、月、星、辰、山、川、邱、陵のような文字と関連しているが、その関連する文字を学び尽くしてはいない。そしてそれをそのままにしておいて、「お前が学んだことをしばらく放っておけ」と言って（再び新しく）色について学ぶというのは、どういうことか。黒色を玄という字、黄色を黄という字だと学び、それは青、赤、黒、白、紅、紫、緑、緇のような文字と関連しているが、その違いを区別しない。それをそのままにしておいて、「お前が学んだ字をしばらく放っておけ」と言って、（再び新しく）字の字と宙の字について学ぶというのは、どういうことか。雲という字と雨という字の間には（雲がわき起こって雨になるという意味の）騰の字と致の字が割り込んでいて、関連するすべてを学び尽くすことができよう。

だから、幼い子供たちが惑わされて、玄（黒）を纏（まとい）と解釈し、黄を圧（おさえつけ）と解釈するようなことが頻繁に起こるのだ。これは子供たちが才能がないからではなく、物事の類似性を感じ取って広く理解させることができないからである。

満ちることは虚の反対であり、仄は平の反対である。満ちるものを仄と対比するのは同じ類ではない。歳は時の一種であり、陽は陰と対をなす。日や歳、日や陽を孤立させて扱うのは、これもまた同じ類ではない。

大体、文字の学び方は、清いものをもって濁ったものを理解し、近いものをもって遠いものを理解し、軽いものをもって重いものを理解し、深いものをもって浅いものを理解する。双方を取り上げてそれを理解すれば、両方とも意味が通じるが、今は片方だけを述べる偏ったものであり、どうして理解することができよう。

また、有形のものと無形である感情は、その類が異なる。無為の情と有為の事柄もまたその類が異なる。江や河、土や石は有形であり、清濁、軽重はその情である。川の流れが急であったり、落ち込んだりするものは、事象である。同じ類でないものをもってそれを触れたとしても、広く理解できようか。このようにして、『千字文』を読んでも、一字も理解できないのである<sup>44</sup>。

朴趾源の批判の要旨は、まず種類をまとめていないことであり、次は違いを区別していないことである。『千字文』が児童用教材であるにもかかわらず、

類別分類体系を選んでいない、玄を纏と解釈し、黄を壓と解釈するような事態が一度や二度ではなく、その結果、千の文字を読んでも、一字も分からない無残な教育現実が派生すると見る。このような問題点を克服するために『類合』の編纂形態は、1527年には『訓蒙字会』として現れ、再び燕巖朴趾源以後に丁若鏞の『兕童学編』まで続く一つの伝統を成してきた。

『千字文』についての他の角度からの批判は『訓蒙字会』の批判である。『訓蒙字会』の編纂動機が『類合』と『千字文』の克服であることは、明らかにされている「訓蒙字会引」を見ると、次のようになっている。

世間で子どもたちに文字を教える人たちは、必ずまず『千字文』をやり、次に『類合』をやった後、様々な本を読み始める。『千字文』は梁の周興嗣が編纂したもので、故事をよくとり、配列しているので、文章としては大変良い。しかし子どもたちがこれを学ぶ場合、文字を読むだけだから、故事やそれで綴った文章の意味を身につけることがどうしてできるだろうか。子供たちに本を学んで文字を覚えさせようとするなら、当然事物に該当する文字を先に身につけ、文字が見聞きする事物の実情と符合するようにした後、別の本に進まねばならない。このようにすれば、故事を知るように、固く『千字文』の勉強に頼れるところはある。孔子は詩を学ばなければまともに話ができないと言った。この区節を解釈すると、詩を学べば、鳥、獸、草、木の名前をたくさん知ることになるからだということだ。今、学ぶ子どもたちが『千字文』や『類合』を身に付け、経史諸書をあまねく読みあさっても、ただ文字を知っているだけで、文字が指す事物は分からず、ついに文字と事物

44 我邦之人、得所謂周興嗣千字文、認之、如天上玉京落此冊書以説人間、何其福也。學天地字、及日月星辰山川邱陵未竭其族、而處捨之曰姑捨汝所學、而學五色、此何法也。學玄黃字、及青赤黑白紅紫綠縹未別其異、而處捨之曰姑捨汝所學、而學宇宙字、此何法也。雲雨之間、騰致介之、能竭其族乎。霜露之間、結為梗之、能別其異乎。夫如是也。故童稚眩瞶、解玄爲纏、解黃爲壓者、比比有之、非是兒之不才、由不能觸類而旁通也。なお、『千字文』について、文末に記した訳注を参照のこと。

盈之反虚也。仄之反平也。以盈對仄非其類也。歳之族時也。陽之耦陰也。曰歳曰陽、孤行而寡居、非其類也。大凡文字之學、清以喻濁、近以喻遠、輕以喻重、深以喻淺、雙舉而胥發之、則兩義俱通、今也單說而偏言之、能有喻乎。又凡有形之物與無形之情、其類不同也。無為之情與有為之事、其類不同也。江河土石其有形者也。清濁輕重其情也。淳流隕突於斯爲事也。不以類而觸之、其可旁通乎。夫如是也。故讀千字已猶一字不知也（「千文」『談叢外記』）。

が違うものになってしまった。それで、鳥、獸、草、木の名前も能く融通してよく知らない者が多い。これは大概文字だけ覚えて身につけるだけで、実際に比べてみることに力を入れていないせいだ<sup>45</sup>。

このように崔世珍は『千字文』が文章としてはいいが、当時の『千字文』の用途が文章で身に付けるものではなく、文字を学ぶためであり、文字学習には非効果的だと言った。この点は、『類合』にも該当することで、文章の勉強が実字中心でなければならないにもかかわらず、『千字文』と『類合』がそうになっておらず、勉強を終えても文字が分かるだけで、文字が指示する内容は分からない「字与物二」現象が現れるということだ。それで『訓蒙字会』は実字重視の文字を意味論的観点から分類し、掲載する編纂方式を採択している。『訓蒙字会』の凡例で「その他に虚字として学ぶに値することがたとえ多いとしても、量が多いことを恐れてあえて念を押すことはできない」<sup>46</sup>として、このような虚字は意図的に排除している。実際に『訓蒙字会』に掲載されている文字を今日の観点から検討すると、何が実字で、何が虚字なのか、その分類基準が曖昧だ。『訓蒙字会』の著者が見るには、『千字文』に掲載されている文字は、実字中心ではなく、児童学習用に不適切だということである。

「字与物二」現象の対策に、実字中心の編成と教育を試みたことが、当時の「字与物二」現象に対する解決策として望ましいのか、という疑問の余地がある。つまりこの点のため柳希春は『新增類合』を編集しながら、虚字を大幅に載せるようになる。

それでは『千字文』がこのような弱点が知られ、これ以上文字学習書として

45 世之教童幼學書之家、必先千字、次及類合、然後始讀諸書矣。千字梁朝散騎常侍周興嗣所撰也、摘取故事排比爲文則善矣。其在童稚之習、僅得學字而已。安能識察故事屬文之義乎。類合之書出自本國、不知誰之手也。雖曰類合諸字而虛多實少。無從通（誦）暗事物形名之實矣。若使童稚學書知字。則宜先記識事物該紐之字。以符見聞形名之實、然後進於他書也。則其知古事、又何假於千字之習乎。孔子曰不學詩無以言。釋之者曰多識於鳥獸草木之名。今之教童稚者、雖習千字類合、以至讀遍經史諸書。只解其字不解其物、遂使字與物二、而鳥獸草木之名、不能融貫通會者多矣。蓋由誦習文字而已。不務實見之致也。臣愚慮切及此、鈔取全實之字。編成上中兩篇、又取半實半虛者統補下篇四字。類聚諸韻作書總三千三百六十字。名之曰訓蒙字會、要使世之爲父兄字、首治此書、施教於家庭總卯之習、則其在蒙幼者、亦可識於鳥獸草木之名、而終不至於字与物二之差矣（『訓蒙字会引』）。

46 虚字可學者雖多、今畏帙繁不敢盡收（『訓蒙字会』凡例）。

使われなくなったかということ、そうではない。当時の教育現実を見ると、『千字文』はこのような批判にもかかわらず、依然として『新增類合』、『訓蒙字会』には置き換わらぬまま、文字学習書として確固とした地位を占めていた。むしろ『新增類合』と『訓蒙字会』は『千字文』とともに、『千字文』の補完的教材として使われた。また『千字文』編纂形式において、朝鮮初期には『千字文』の本文、つまり大字だけで構成された『千字文』として編纂された。訓民正音創製以後には、大字と1-2個のハングル注釈の小字がある『千字文』編纂形式が現れた。その次には、4字の漢字ごとに小字の漢字で注解を付して、各大字の漢字の下には、字典のような様々な漢字の注解と類似語および対語、文字の清濁まで付した注解『千字文』のような方式で編纂された。時代によって編纂方式を多様化したものとして<sup>47)</sup>、『訓蒙字会』と『新增類合』が問題視する教育現実を克服しようとしたものと見なくてはならないだろう。

ここで一つの指摘すべき点は、朝鮮中期に『新增類合』と『訓蒙字会』などから文字教育に関する新しいアイデアが提起され、議論されたということである。言語学習で実字教育や、類別分類体系がどれだけ望ましいのかということについて、当時の議論の適合性問題とは別に、このような論議がなぜ提起されたのか、つまりこのような論議を可能にした条件が何であったのか調べてみなくてはならないだろう。

まず『類合』、『訓蒙字会』、『新增類合』の相次ぐ編纂と議論は、何よりも漢字学習で何を基本的な漢字とするのかということについての教育に対する苦悩の結果と見なくてはならない。朝鮮中期の社会経済的变化と学問の発達によって、新しい事物と現状を表現する単語が増加し、その単語がいよいよ重要になりつつ、文字生活に変化がもたらされ、これに応じて児童が身に付けねばならない基礎的な漢字の範囲と難易度の程度、そして効果的な教育方法についての論議が提起されたためである。二つ目に、提起された問題をどうにか解決する程度の性理学的、文字学的な学問の発達が起こったために『新增類合』と『訓蒙字会』などの教材が現れたと見なくてはならないだろう。つまり児童教育の性格についての認識と、それに見合った教育書を開発するほどに、朝鮮性理学が発達したのである。三つ目に、初等教育機会の拡大、つまり書堂という初等教育機関の拡散という時代の流れを反映したものである。『訓蒙字会』を書いた崔世珍は『小学便蒙』のような儒学入門書とともに作っており、『新增類

47 金鉉奎「蒙学教材としての『千字文』」成均館大学校教育大学院修士学位論文、10-11頁。

合』を書いた柳希春も『続蒙求』を作り、これらの教材をもって、家塾で実際に子供たちに教えたりしながら教材を作り出したりもした。崔世珍が『訓蒙字会』の凡例で述べているように、諺文字母を掲げて、教育の恵沢を受けられず、諺文も知らない人に、文字生活ができるように配慮することで、教育機会の拡大に貢献しようとすることや<sup>48</sup>、『訓蒙字会』が成童以前の児童を対象にする学長（教育機関）の教材に使われることを希望していたことなどは<sup>49</sup>、当時のこのような趨勢を反映していたものと見ることができる。

#### IV. 結語

この論文では『童蒙須知』に代わる『童蒙先習』の登場と『千字文』を克服しようと編纂した『類合』、『童蒙字会』、『新增類合』などの登場を中心に、朝鮮中期の初等教育教材についての新たな関心の台頭を検討してみた。特に教材の編纂を重点的に調べることによって、その編纂に反映している教育についてのアイデアがどんなものであるのかを検討した。『童蒙先習』の場合、教育の最初から子どもたちに学問の要諦を学ばせるようにしなくてはならないというアイデアが反映していた。このアイデアは当時朝鮮性理学の性格と結びつき、『童蒙先習』は日常の細々とした行動指針を詳細に記録する内容構成ではなく、経と史の大綱を抽象的に整理した内容構成をとるようになった。『千字文』を批判しつつ台頭した『類合』、『童蒙字会』、『新增類合』などの場合は、児童の文字学習における実字重視の教育を行いつつ、文字の構成および配列方式は、類別分類体系に従うというアイデアが反映して開発された教材である。しかし『童蒙先習』は、当時使われていた『童蒙須知』の代わりに、教育の実際場で愛用され、朝鮮中期以後、教材として確固たる地位を占めるようにな

48 辺境や田舎の人たちは、諺文を会得する人が多くないため、諺文字母を著し、それを使ってまず諺文を学んだ後、『訓蒙字母』を学べば、悟るのに役立つものとなるだろう。漢字を知らなかった人が諺文を学び、それを知るようになれば、師匠の教えがなくても、文章に通じる人となるだろう（凡在辺鄙下邑之人、必多不解諺文、故今乃並著諺文字母、使之先学諺文、次学字会、則庶可有曉誨之益矣。其不通文字者、亦皆学諺而知字、則雖無師授、亦將得為通文之人矣）。『訓蒙字会』凡例。

49 凡そ地方の州郡でこの本を刊行し、村ごとに学長を設け子どもたちを集めて教え、勤勉に励む者に対しては施しを与え、怠惰な者に対しては懲罰を与え、彼が成童になり、郷校国学に入るようにすれば、人がみんな楽しく学ぶことになるので、子どもは成長するだろう（凡在外州郡、刊布此書、每於一村一巷、各設学長、聚誨幼稚、勤施懲勤、俟其成童、升補郷校国学之列、則人皆樂学、小子有造矣）。『訓蒙字会』凡例。



る。しかし『類合』、『訓蒙字会』、『新增類合』などは、『千字文』の補完的な教材として使われるほど、教材としての確固たる地位は持っていなかった。代わりに、文字教育として開発されたこの本が、教育の実際場で使われておらず、むしろ『千字文』が引き続き使われていたのと異なり、『千字文』の勉強の問題点は、燕巖の場合のように朝鮮後期にも依然として指摘されている。

朝鮮中期に初等教育をめぐる活発な論議と教材の開発という現象が見られるようになった背景には、当時の学問の発達とも関連がある。また教育機会が次第に拡大しつつ、既存の書堂という教育機関が完成教育を提供する初等教育機関としてその位置を占めながら、さらに教育対象の特性についての考慮と、その特性を考慮する初等教育を行わなくてはならないという初等教育の独自の性格についての認識がはっきりしてきたことと関連していたとすることができる。

教育についてのアイディアの変化と、これによる教材の開発を、教育機会の拡大および初等教育機関としての書堂の成立を連結させるには、色々解決せねばならない問題が多い。その仮説がさらに説得力を持つためには、今後伝統的な儒教教育で児童観がどうであったのかを明らかにせねばならない。今日の発達理論でのように、児童が青少年や成人とは質的に違い、独特なものだと認識されていたのか、いなかったのかを調べ、児童観に変化が現れたのか、現れたとすれば、どのような変化が現れたのかを明らかにすることである。初等教育の対象を指している童稚、童蒙、初学者、小学者といったことばが、生物学的な年齢と関係なく、愚かさを覚えずにいる状態、生物学的な成熟と関係なく、元服を執り行う以前の状態、そしてその名の通りアイデンティティを持った立派な人間として遇されない文化的状態を褒め称えるものとして使われていたとすれば、教育を始める最初の段階から教育対象の特殊性を考慮することは意味がないだろう。しかし児童の心理的、年齢的特殊性を考慮する児童観が提起されれば、教育でもこれを考慮する教育論が提起されるだろうし、これはすなわち初等教育の独自性を主張するものとして連結され、その結果、初等教育機関がそれなりの独自性を持った別途の教育機関として位置づける前提条件となるだろう。

次に、朝鮮前期の書堂が初等教育と中等教育を未分化のまま教育を実施したが、中・後期になると次第に分化していくことを示すことができねばならない。書堂が、一方では書院の性格を備えていくことで、例えば享祀機能を同時に遂行したり、書院に昇格することを期待しつつ、主として科学準備や道学の勉強をする場としての地位を得たり、他方では、書堂の教育機会が平民層に拡大し



つつ、教育対象を村の幼い子どもに限定して文字の勉強や初歩的な儒学の中味を完成教育として提供する書堂が、次第に高まる人気を示す必要がある。事実、朝鮮初期や中期の書堂が、初等教育段階と中等教育段階を明白に区分していないまま教育を実施してきたことは周知の事実だ。そして朝鮮後期になって、分化する現象が現れ、未分化状態が穏当なものか否かに関係なく、また分化の方向が正しいかどうかに関係なく、このような現象が定着したことは先行研究の成果であり、確認されてきている点である。問題は、書堂がいつから村の子どもを対象に完成教育を提供する初等教育機関としての性格を持ち始めたのかを確認することである。初等教育についての議論と教材の開発が、教育現実と無関係に学問の発達結果だけで現れるということは難しい。また、書堂教育が一生学問的生活をしていく少数のエリートにだけ該当するとすれば、対象の特殊性を考慮した初等教材開発と議論は提起されることもないだろう。少なくとも初等教育の機会が拡張され、初等教育が誰でも受けられる普遍的な国民教育の性格を持ち始める時に、初めて対象の特殊性を考慮した教材の開発と議論が提起されるからである。

### 【訳注】

『千字文』冒頭部分は次のように記されている。

天地玄黄 宇宙洪荒      天は玄（くろ）地は黄色 宇宙は広大  
日月盈昃 辰宿列張      日月は満ち傾き 星たちは並んで広がる

.....

雲騰致雨 露結為霜      雲がわきおこって雨がふり 露が凍り霜が立つ

訳出に当たっては、原著者 姜明淑教授の校閲を経たほか、金龍 韓国教員大学教授の多大な助力を得た。

